

2023年5月14日 仙川教会 「神はわたしを知っておられる」

詩編 139 編 1-24 節、マタイ 10 章 29-31 節、 讚美歌 21-166 (1, 3)、484 (1, 2)

聖書が証する神さまは、すべてのものの神でありながら、私たちを捜し求め、この私を知り尽くし、その上で愛し抜いてくださる神さまです。神さまはわたしを知っておられる。それは私たちの安心の源です。

詩編 139 編は、こう祈り始めます。「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」(1 節)。この言葉をきっかけに、神さまが私をいかにことごとく、すべて完全に知っていてくださっているのかということに神讚美をもって語り連ねています。18 節までずっと、神さまが知らないことは何もないのだと、すべて知っていてくださるのだと、具体的に様々な方向から、言葉を尽くしています。この祈り手は今、苦しみの中にいるようです。19 節から、祈り手はかなり激しい口調で、神さまに助けを求めています。私を苦しめる敵を滅ぼして私を助け出してください、と神さまに激しく嘆き願っているのです。そして最後に、こう付け加えます。23 節「神よ、私を究め、わたしの心を知ってください。…悩みを知ってください」と祈り求めています。

この祈り手の苦しみは、おそらく、誰にも分かってもらえない苦しみではないかと思えます。周りから誤解され、罪をかぶせられて、責め立てられているのかもしれない。あるいは、周りの悪意によって陥れられているのかもしれない。でも、誰にも分かってもらえなくても、神さまは、この私を分かっています。だから大丈夫。この詩編は、「わたし」を知っていてくださる神さまへの信頼に満ち溢れた祈りです。

神さまは私を知っておられる。それは全知全能の神としては、当たり前なことでもあります。「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と先ほど共に告白しました。神さまは天地万物の造り主なのだから、被造物をすべて知っておられる。被造物の一つである私のこともすべてを知っておられるというのは当たり前です。でも、この詩編が最初から最後まで「神は私を知っておられる」と力を込めて語るのは、被造物としての一般論以上のものです。

この詩編の祈り手はずっと「わたし」と語り、神さまに対して「あなた」と呼びかけ、親しく語りかけ続けています。「わたし」「あなた」という語は、日本語では省略されることが多いので、日本語聖書では目立ちにくいのですが、あえて省略しないで 1 節から 3 節まで読んでみます。原語も英語聖書も、「わたし」「あなた」がしつこいほどについています。

「主よ、あなたは私を究め、あなたは私を知っておられる。私が座するのも、私が立つのもあなたは知り、遠くから私の計らいをあなたは悟っておられる。私が歩くのも、私が伏すのもあなたは見分け、あなたは私の道にことごとく通じておられる。」(詩 139:1-3)

この先も、ずっとこんな調子です。「わたし」と「あなた」という親しい関係。一般論ではありません。「わたし」と「あなた」という親しい関係を結んで、そのように臨んでくださる神さまに対して、全面的信頼を寄せている祈りになっています。神さまは私を知っておられる。神さまは、この私を、力を尽くして知ろうとして下さり、知っていてくださるのだ、と力強く、喜びをもって告白しているのです。

「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」(1 節)。「わたしを究め」の「究め」は、「調べ尽くす」という意味の言葉です。特に旧約聖書では裁判の場面でよく用いられています。この人が有罪か無罪かを判定するために、出来る限りの証拠を集める、証拠を調べ尽くす、と言うときに

よく用いる言葉です。だから、神さまは、全知全能の神として、自動的に被造物の一つである私のことをもちろんすべてご存じだというだけではなく、この私を積極的に知りたいと捜し求めてくださる方だと告白しているのだと思います。神さまは、私を見つけ出し、捉えて、もっと知りたい、知りたいと調べ尽くしてくださって、これ以上ない位にまで知ってくださる、知り尽くしてくださるお方なのです。

苦しみの中にある祈り手が、神さまが「わたしを知っておられる」と賛美をもって告白するのは、「わたしが無実なのをご存じである」、「わたしの潔白を知っていてくださる」というニュアンスが強いかと思います。「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」、そこから始まる前半3分の2くらいの18節まで、神讃美が続くのですけれども、その部分も、ただ事実の提示ではないはずです。また、神学的議論でもないはずです。後半で19節から、苦しみを嘆き、救いを激しく願う言葉の後の23節では、「神よ、わたしを究め、わたしの心を知ってください」という嘆願の形になっているからです。むしろ周りの誤解だか悪意だかによって、苦しみの中に置かれている祈り手が、誰も助けてくれなくても、神さまこそが潔白を証明してくれるはずだ、神さまこそが救い出してくださるはずだという希望の裏付けとして、「神は私を知っておられる」と語られているのだと思います。神さまが、私を調べ尽くして、知っておられることは、神さまが私を救ってくださることがいかに確実なことかということの保証のように祈られているのだと思います。

神さまは私たちを、私を、いかに完全に知ってくださっているか。詩編139編を読み進めていきたいと思います。

「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」(1節)。この1節があつて、その次の2節から18節まで、神さまがことごとく私を知ってくださっている、知らないことは何もないのだ、どんな時にもどこにいても、と、しつこいほどに細かく、しつこいほどに具体的に、歌いあげられています。

2節3節は、祈り手「わたし」の具体的な行動を挙げて、それを神さまは全部知っていてくださると歌います。「私が座るのも、私が立つのも」、「私が歩くのも、私が伏すのも」。具体的な普通の行動を取り上げて、私のどんな行動もご存じである。これ非常に具体的です。

行動だけではありません。2節「わたしの計らい」を神さまは悟ってくださる。「計らい」とは、「計画」とか、私の「思い」とか「考え」とも訳される言葉です。私の思っていること、私が考えていること、私が感じていることも分かっている、そして3節「私の道」にもことごとく通じておられる。「道」といって、ここで何を具体的に指すのかは定かではありませんが、これから自分が歩む道、これから歩もうと思いついて描いている将来の方向性かもしれません。それも全て神さまは知っていてくださる。

4節には、「わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに」、祈りを言葉にする前に、「あなたはすべてを知っておられる。」イエスさまが主の祈りを教えてくださったあの日、マタイによる福音書の方で、くどくど祈るなど教えてくださった時に、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(マタイ6:8)と、教えてくださいました。もちろん、祈りを教えてくださっていた時には、神さまはご存じだから「祈らなくていい」ではありません。「祈りなさい」の文脈で、くどくど願う項目を挙げることに心を砕くのではなく、「こう祈りなさい」。自分の祈りを打ち明けて、神さまは何でもしっておられるからと、そのようにおっしゃっていました。

詩編139編5節6節では、神さまが私を知ってくださっているその度合いが、いかに完全で高く深いか、と語ります。「前からも後ろからもわたしを囲み」(5節)、わたしの全てを余すところなく見て

いてくださり、「その驚くべき知識はわたしを超え、あまりにも高くて到達できない」(6 節)。私が私を知っているよりも、もっと深く、もっと完全に、もっと正確に、神さまは私を知ってくださっている。このように告白しています。私を知ってくださる。

7 節からは、空間的にも全てということでしょうか。わたしがどこに行っても、神さまはそこに共にいてくださって、そこで見ていてくださるのだと歌っています。「どこに行けば、あなたの霊から離れることができるでしょう。」離れようとしても離れられないくらい、こんなに共にいてくださっている。こんなにしっかり見守られている。神さまの力が及ばない場所はどこにもない。地上世界にはどこにもない、だけではありません。8 節が続きます。「天に登ろうとも、陰府に下ろうとも…」。「陰府」とは、死者がいる世界のこと、旧約には、地下にあると思われていた死者の世界「陰府」には神さまの力が及ばない、と考えていた人が多くいたようです。だから死が怖い。そのような表現がたくさんあるのですが、でも詩編 139 編は言います。神さまは陰府にもいてくださる。陰府に下ってさへも、神さまはそこにいてくださる。見守っていてくださる。11 節 12 節は、闇の中に行ったとしてもさへも、闇の中では何も見えないのが普通なのだけれども、暗闇に行っても、神さまは見ていてくださる。知っていてくださる。

13 節からは、神さまの創造の業を、私という一人の人間の創造に特化して語る形なのですが、この私がことごとく神さまに知られていると語っています。私の内臓も知られている、私の骨さえも全部知られている。この私が存在する以前から、全く存在しなかったそのずっと前から、神さまは私を知っていてくださっていた、ずっと知っていてくださっている、と賛美が連ねられています。だから大丈夫だと語るのです。

ただ…、神さまは私をいつでもどこでもすべてしていてくださる。それを、自分の現状に引き付けて考えてみると微妙に思うところもあります。私はノンクリスチャン家庭で育ったのですが、特に子供の頃、母は当時クリスチャンではなく、でも天に神さまがいて何でも見てるよという話は聞いていて、私は天に神さまがいるということは小さい頃から信じてはいました。でも、その頃の神さまは、嘘をついても全部見えて、ばれていて、罰を与えられる怖い神さまでした。すべてを知っておられる神さま、どんなことでも見えておられる神さま、調べ尽くして下さる神さま、神さまに全部知られている。それは怖いと思っていたことがあります。旧約聖書には、神さまが私のすべてを知っておられるということは、繰り返し、繰り返し語られています。でもその神さまがすべてを知ってくださっているのが、「嬉しくて、恵みで、救い」なのか、それだけではなくて、「恐ろしくて、嫌で、逃げたい」事柄なのか。実は旧約聖書には、両方あります。

詩編 139 編は明らかに「嬉しい」。神さまがわたしを知ってくださっているということは、安心で、救いの保証のように絵描かれています。しかし、例えば、旧約聖書にはヨブ記の主人公ヨブは、神さまに見張られていると感じています。神さまから逃れられないと嘆いています。というのは、ヨブは精いっぱい正しくまじめに生きていたつもりだったのだけれども、ひどい苦難が降りかかってきて、しかもヨブはその苦難が神さまから罰として与えられたと感じていました。ヨブは考えました。神さまは何でも知っている。私が気づいていない私の罪をあぶり出し、チェックしている。だから罰として苦しみを与えられているんじゃないかと、そういう風に思っていました。だから、ヨブは「見守られている」ではなくて、神さまに「見張られている」と思っていました。実は、旧約では、「見る」と「見張る」と「見守る」は同じ単語です。文脈によって日本語の聖書では訳し分けられているだけです。神さまが共にいて

見ていてくださるのが嬉しい、と言う時は「見守られている」という表現だし、神さまに見られるのが嫌だという時には「見張られている」と表現されています。旧約聖書だけでは、両方の可能性があります。だから、神さまがすべてを知っておられるという時に、それを時と場合に応じて、喜んだり、安心したり、そうではなく怖がったり、いろいろ揺れるしかないのが旧約聖書の限界かもしれません。旧約の時代にはイエスさまを知らなかったから。

では、私たちにとってはどうなのか。神さまがすべてを知ってくださっていることは、私たちにとってはどうなのか。イエス・キリストの十字架という決定的な事実を私たちは知っています。イエス・キリストの十字架によって、私たちには神さまの愛が真実であること、神の愛が決して揺らがないということが示されました。私たちがどうであっても、それにもかかわらず、神さまは愛し抜いてくださっている。それがキリストの十字架によって私たちに示されたのです。

だから、神さまはすべてを知ってくださっている。すべてを。悪い事もやってしまった悪いことも、悪い思いを抱えていることも、または自分自身も気づかない罪も、神さまはすべて知ってくださっている。知られてしまっている。でも、それにもかかわらず、愛し抜いてくださる。だから、私たちにとって、神さまが私を知っておられることは、100%安心の事柄です。

私たちは神さまに隠し事をしなくていいのです。すべて知られているのです。神さまに対して隠すことはできません。それは、私にとってすごく安心なことです。取り繕わなくていいのです。きれいな言葉だけで祈らなくていい。ドロドロの私を神さまはもうすでに知っておられるのです。隠そうとしても隠せない。だから隠さなくていいのです。それでもなお、こんな私なのにもかかわらず、愛し抜いてくださっている。あなたを救うという神さまの約束は、全く、揺らがない。

「神さまがすべてを知っていてくださる」ということこそ、キリスト者にとっての恵みだと、私は思っているところがあります。10年ほど前の出来事をお話します。礼拝の受付に立っていた時、キリスト教学校に通う中学生の女の子から突然こういう質問をされました。「キリスト教を信じてよかったことはなんですか。」キリスト教学校に通う中2の女の子で、学校の宿題だったようです。教会に行き、自分で考えた質問を牧師にして、その答えと感想をまとめる宿題。「キリスト教を信じてよかったことは何ですか。」私がとっさに答えたのが、これです。「神さまは全部私を知っていてくれてるって、ちゃんとわかるようになったことかな」と。「誰に何思われても、誰に何言われても、でも、神さまは私の本当のことを知ってくれてるんだよね」ととっさに答えました。それが私の本音のようです。

最後に、詩編 139 編の 19 節から 22 節の激しい嘆願の言葉について、イエスさまの十字架という事実を頭に置きながら考えてみます。敵を殺してくださいというような、激しい嘆願。逆らう者を打ち滅ぼしてください、とまで願っています。私たちは知っています。まさにこのこと、打ち滅ぼされるという役割をイエスさまがすべてになってくださって、イエスさまが引き受けてくださったということ。滅ぼされなければならない私たちは、イエスさまがその滅ぼされる訳を全部引き受けてくださったから、私たちはそれによって、私たちにはひたすら恵みが与えられるようになりました。イエスさまをただ信じるというそれだけで。イエスさまが十字架で滅びのすべてを引き受けてくださった、その滅び、私のイエスさまが死んだ、それに伴って私たちの神に逆らう自分が死んだ、と見なしてくれるような、神さまの愛、恵みによって生かされる、というところへ引き上げてくださっているのです。神さまの恵みに生かされているのです。

私たちの救い主イエス・キリストの十字架と復活。それによって、私たちは神さまの愛を知らされま

した。だから、神さまがこの私に特別に目を注ぎ、知ろうとしてくださり、知り抜いてくださる、それはただただ嬉しいことです。安心なことです。知り抜いた上で愛してくださるのです。そんな神さまに私たちはすべて知られている。だから私たちは今日も明日も安心して生きることができるのです。